

パネル発表「アンケート調査から見る沖縄県の学校飼育動物の現状」

永井良夫 又吉栄一郎 比嘉真季 山下ちさ 土城勝彦 中込健次

沖縄県獣医師会では、沖縄県の学校飼育動物の現状を把握するため、平成18年10月に沖縄県下の小学校に対し、アンケート調査を実施した。その結果、沖縄県の小学校における飼育動物の現状、問題点が抽出できたので報告する。

アンケートは沖縄県下41市町村中35市町村、全284校中166校から回答を得た。動物を飼育している小学校は140校(85%)を占めた。学校で動物を飼育する目的については、情操教育のためが95.2%、教材、鑑賞用が以下続き、以前から飼われているからという回答が40.5%であった。

飼育動物はウサギ、ニワトリを飼育している学校が共に60%を超え、アヒル、カメがそれに次いだ。ウサギの飼育数は一番多い学校で41羽を数え、20羽を超えている学校も複数認められた。

飼育については、出校時は5、6年生で組織された飼育委員会を中心に行われており、長期休暇時は、教職員が中心に世話が行われており、土日祝日では44.2%の学校で世話がされていなかった。また、飼育委員以外の多くの児童が、小学生時代に飼育されている動物の世話をすることなく卒業していくことが推測された。

動物飼育における問題点は、休日の管理(61.8%)を筆頭に児童の衛生面(48.1%)、動物の健康問題(42%)、経費の問題(38.9%)が上位を占めた。

これら諸問題の解決方法は、同僚に聞く(57.3%)、本やインターネットで調べる(47.3%)、知人に聞く(40.5%)と上位を占め、獣医師に相談するは8.4%に過ぎなかった。

また、飼育動物が病気や怪我をした時、獣医師に診療を求めるは19%に過ぎず、残りは校内で出来る範囲の対応をしていた。これらは、小学校の閉鎖的体質ならびに獣医師の消極的な対応に起因するものと思われた。

動物と触れ合う時間、場所がありますかという設問に対しては、45%の小学校があると答えた。また、情操教育に用いられたことがあるかという設問にも、44%があると答えた。教材として利用されたことがあるかという設問に対し

ては、59%の小学校において利用していると回答された。

これらの数値については、個人的には意外と多いという感想を持ったが、これらの設問について、どのように児童と触れ合わせる時間を作っているのか、情操教育のため、また教材として、どのように利用したのか、詳細について問うていなかったため、どのような授業がされたのかは不明である。しかし、動物を飼育する目的についての前述の設問において、情操教育のためという回答が95.2%であることを考えると、十分な利用がされていないと判断せざるを得ない。

今後の動物飼育に対する期待については、もっと授業で活用したい(95.2%)、子供たちと触れ合わせたい(51.1%)であった。

動物介在教育に興味があるかという設問については79%があると解答、県内で学校飼育動物に関する協議会が発足したら参加できるかという問いには73%が参加を希望した。

また85%の小学校で、今後の動物飼育に対して、獣医師のアドバイスが必要と回答した。

獣医師会への要望は、無料または廉価で診療して欲しいとの要望が一番多く、飼育法や衛生対策等へのアドバイスを求める声がそれに次いだ。

飼育活動に対する意見については、感染症、アレルギーに対する不安、日頃の校務が忙しいため、動物飼育にまで手が回らないとの声が多かった。

小学校での動物飼育は、多くの教員の方々が、その重要性、意義について認識はしているものの、動物飼育に対する知識が十分でないこと(教員自身に飼育体験がない、大学時代、教員研修などで教育を受けていない等)が、動物を適正に飼育し、積極的に授業で活用するためのモチベーションが維持できないと推測される。

今後、沖縄県獣医師会では、県教育庁、市町村教育委員会と密に連携し、教職員研修、触れ合い授業をなるべく多く実施することで、これらの問題の解決にあたりたいと考える。

((社)沖縄県獣医師会)